

aphim Doll's Fetishism

セラフィム・ドールズ・フェティシズム

伊吹 理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seraphim Doll's Fetishism セラフ
イム・ドールズ・フェティシズム

【Nコード】

N2256Z

【作者名】

伊吹 理緒

【あらすじ】

私立アザレア女学園。

そこは、清らかな風歌^{きしよましろ}う内部進学式の宣教学校。

今年で十六歳の徽生^{きしよましろ}真白は、両親の強い希望でその学園に外部編入する事になってしまう。

『パーフェクト・クレンリー
完全清潔淑女』

『セクシュアル・パーバジョン・ラビット
変態悶絶兎』

右も左もわからぬ真白を待ち受けていたのは異様なあだ名で呼ばれる癖者だらけの天使達だった。

異様が異常を呼び、異質で異端な日々が真白を誘っていく。

貴女が貴女のままであいらぬように、わたしがすべて壊してあげる

思春期真っ只中の少女達のフェティシズム（禁断性愛）が発露する波瀾の学園ガールズラブストーリー、開幕。

この作品は以前投稿した同名作品を大幅に修正、加筆したものです。以前のものと設定等が所々違いますが、こちらが本筋となりますので、以前のものをお気に入り登録してくださった方々には大変申し訳ありませんが、以前のものは削除させて頂きます。

尚、本作では作中、文章強調のための傍点を多々使用しております。PC閲覧では問題ありませんが携帯閲覧では上手く表示されません。大変申し訳ありませんがご了承お願い致します。

Heartbeat Doll

「貴女は熾^{セラフイム}天使を宿した人形なのね」

幾億の星屑を躍らせる夜天を、少女は深遠な瞳で覗いている。

続く言葉は無く、追う音も無い。ただ天を仰ぎ、ただ星屑を覗く。鋭く伸びた月光は少女の髪に飲まれ地に落ちることができない。

真黒だった。

凜然たる背を這い、上腿まで到るその黒き細髪は、時折吹く無音の微風ですら大きく靡いていた。

ふわりと靡き、ゆらりと落ちる。

落ちるのは影。少女の影。月光の代わりに地に落ちる。影は落ちて広がり、闇になった。否、少女の髪自体が、地の闇なのかも知れない。

「……人形？」

闇に溶けようとしていた小さな光。それも少女だった。

闇が黒なら、光は白だった。黒髪の少女を見つめるのは白髪の少女だった。

黒髪靡く少女の背を、白髪靡く少女の瞳が見つめる。少女が、少女を 見つめている。

「……やっぱり、わたしは人形 なの？」

闇は答えない。

光は消えそうだった。

「……人間じゃ、ない？」

黒は応えない。

白は滲みそうだった。

「人形は、人間の傍に、いられない？」

人間は喋らない。

人形は喋れなかった。

無音。

影が揺れた。

黒髪の少女がゆっくりと、振り返る。

「……私は」

微笑んでいた。

「貴女を愛している」

どくん。

その日。

人形に、鼓動が生まれた。

? Spring Breeze

徽生真白は通学門を二歩進み、そこではたと気づいて踵を返した。一度内に潜った門を同じ歩数で外へと潜り、足を止め、真白は今し方歩いてきた路を見つめる。

路の向こうから幾人の少女が歩いてくる。

どれも知らぬ顔。

おはようございます。

少女達は微笑みながら、門前の真白に朝の挨拶をして過ぎて行く。

おはようございます。

真白は無表情に返す。少女達に挨拶されるたび、返す。

五回ほど繰り返した。

やはりどれも知らぬ顔。

知らぬのに微笑んでいる。

少女の波は門を抜け、学舎へ流れる。清らかな声と無垢な笑みが波に逆らう真白を飲もつとする。

ああ、今日も、

また一人。また二人と波が来る。おはようございますと、ごきげんようと潮が鳴る。

完璧だ。

真白は波に飲まれぬように前だけを見た。舗装された眼前の通路。緩やかな勾配の下り坂。坂はただなら延々に伸び、遥か彼方に県道が見える。

坂を上る少女達。波はまだ暫く続きそうだった。

真白は目を細め県道と坂が交差している遠景を見る。県道から坂へ吹き上がる風があった。

いや、暴風かな。

今日も今日とて、と真白は失笑する。

「まあしろお！」

風が鳴いた。冷え張り詰めた空気が震え、路肩の草から朝露が落ちる。

少女だった。

少女の波をかき分け上る少女だった。

少女は坂を疾走する。両の足を力いっぱい躍動させどいてどいて、と少女の隙間を縫って行く。

少女が過ぎれば風が吹いた。

風は淑やかに歩んでいた少女達の着衣を乱す。

「きゃっ」

黒いプリーツスカートがふわりと巻き上がり、白いセーラーギャケットがひゅっとな膨らむ。

「わはははは、ワタシは風より速いのだ！」

「ちょ、ちょっと詩尋しじゆんさん危ないじゃない！」

危ないのは坂道での疾走の事か、はたまた崩された防壁の内的事か。少女の一人が白肌を赤く染めて制する。だが止まらない。

「ゴールっ！ 坂道走記録更新！ つつても今まで記録した事ないけどね」

少女は坂を上り切り高らかに笑った。

「……おはよう、ほのちゃん」

門前に立つ真白は早朝から爽快な笑い声をあげる親友に声を掛ける。ほのはよっす、と短く澆漑に返した。

「お待たせお待たせ。ワタシ今日は遅刻しなかったよ。あれだね、春だからだね」

ほのは逆立った栗色の短髪をごしごしと強引に撫でつけて、春は良い、などと呟き伸びをした。

「……春でも一昨日は遅刻した。ほのちゃんの遅刻常習は季節とか気温とかの影響じゃなくてただの怠慢だよ。精進しなさい」

「わはは、根に持つてる持つてる。一昨日はごめんって、けどさ律儀にワタシが来るまで待っててくれるのは有り難いんだけど、それは遅刻しない時間までにしてよ。遅刻したワタシを待って真白まで遅刻するとか、二重の責め苦だよ」

「……」

ほのが遅刻した日は真白も同じく遅刻する。遅刻すると言っても真白は毎日始業時刻の三十分前にはここに到着しているわけだからそれは遅刻ではない。だが二人はいつもここで待ち合わせして一緒に学舎へ向かう事になっているので、ほのが来なければ真白は門を潜り進む事が出来ないのだ。いくら早く学校の前に居たとしても、始業時刻に教室に居なければ問答無用に遅刻である。

一昨日も遅刻した。

真白はほのが来るまで絶対にここを動かない。

だから、ほのが遅刻した日は必ず真白も遅刻する。

「本当に、ナミダが出るほど嬉しいけどさ、そこまでして守るほどの約束じゃないよ。真白の家とワタシの家は離れてるから一緒に登校できないけど、ならせめてここから先は一緒に行くって決めてたけどさ、それは契約じゃなくて約束なわけだ。契約は破れば何かしらの罰が与えられるのが常だけど、約束ってのは友達が友達を思っ
て結ぶ決め事なんだから、友達の為になる破り方なら破って良いんだよ。ワタシが遅刻するのは自業自得なわけで、先生に怒られるのは仕方ない。だけど遅刻してない真白が怒られるのは嫌だよ。その時点でこの約束は友達の為になってない。だから、そういう場合は何の気になしに破ってくれよ」

これも、約束だ。とほのは微笑んだ。

「……わかった。じゃあこれからはほのちゃんかわたしの為にならない二人の約束なら容赦なく破る^{クリア}ね。手始めに、宿題を写させてあげるって約束もほのちゃんの為にならないので今日限り止めます」

「 ケースバイケース！」

「うふふ、だめ」

坂を上る最後の波が二人の横を過ぎ通学門を潜った。

「さて、ワタシ達も行きますか」

時刻は八時十五分。始業時刻まであと十分だった。
真白は小さく頷いて歩き出す。

「あ、そういえばわたし今日考え事してて、気づいたら門を潜ったの」

直ぐに気づいて踵を返したんだけど、と真白は続ける。

「お？ そうなの？ 何々、真白が夢中になるほどの考え事って何なのさ」

「……うん、わかんない」

「何じゃそりゃ」

寝ぼけてたんじゃないの、とほのは笑った。

「いや、寝ぼけては無いけど……だめ、思い出せない」

やっぱり寝ぼけてるのかも知れないと、真白は頭を振るった。

「ま、思い出したら教えてよ」

「……うん」

風が吹く。

柔らかかで、清らかな春の風。

「さて、今日も今日とて、信仰厚く行きますか！」

「うふふ、そんな軽口だと怒られちゃうよ？」

大丈夫大丈夫、愛があればすべて許されるから。と言ってほのは

軽快な歩調で門を潜った。

春風を背に感じながら、真白も続く。
間もなく終る四月の風だった。

? brown study

闇だ。

真黒な闇だ。

右も左も手前も奥も何も無い。

いや、闇が在る。真黒い色が其処に在る。

どこまで在るのだろう、どこで終るのだろう。

何も見えない。黒しか見えない。見えなければ観測出来ない。終わりが在るのかわからない。

音は、音は聞こえる。

衣擦れの音。誰かが小さく動いたのだ。

風の音。先程まで身体を撫でてた春の風。今は遠い。

呼吸の音。吐き出す息すらきつと清い。

そして、

心臓の音。

ああ、聞こえる。確かに聞こえる。

鼓動だ。

これは自分の音だ。他の誰かの音ではない。自分だけの音だ。

確かに在る。

真黒な闇の中に、確かに在る。

見えなくても、視えないからといって、何も無いわけじゃない。きつと、この黒の中には自分が在る。

他の誰でもない、自分自身が其処に在る。

黒を見つめ、闇と知覚し、其処へ自分を映す。意識が闇へ滲み、深層に在るべき見知らぬ自分^{ほんもの}が千々の欠片とって現れる。

闇は鏡だった。

始めは何も無い。何も映らない。

次に音が聞こえる。いや、音を探すのだろう。見えなくて怖いから、怖くないと認める為に瞳の役目を耳に移して探すのだ。

其処が何処なのかを。

怖くない。怖くない。

其処は怖くない。

音が在る。音が在るよ。

怖くない。それは貴女の生きている音。

聞こえる。聞こえてる？

鼓動だ。動いてる。確かに動いてる。

其処が怖くないとわかると、途端に闇は鏡に変わる。光無き不可視の世界に像が現れる。

其れは心と呼ぶものか。

誰かが心と呼んだのだ。

心は形が無いらしい。

心は誰にも見えないらしい。

だが闇は心を映すのだ。欠片と成して次々自分に見せるのだ。

映る。居る。在る。

自分にものを見つめる自分ほんものが。

ああ、知っている。貴女の名を。

心など借り物の名。

だがどうか、本当の名を呼ばせないでほしい。

このまま静かに眠っていてほしい。

眠っていれば其処は闇なのだ。只の真黒い闇なのだ。

ええ、おやすみなさい。

願わくば、

永久とわに。

始業のチャイムが鳴った。

真白は瞳を開く。

其処に闇は無くなっていた。

「……はい、宜しいですよ。皆さん目を開けて黙想を終えてください」

女教師は温和な表情を端から端へ向ける。反応する様に次々と生徒達は闇から帰って来た。

「では授業を始めましょう」

がさがさと、生徒達はそれまでの禁制的沈黙を破り、それぞれが机の上に教科書やらノートやらを音を立て置き始める。真白も続く。真白はふと教室を見渡した。皆の表情が気になったのだ。

始業前の黙想。毎朝の日課。黙し、自身の内へ沈み何を見たのか。それが気になった。

窓際、前列に定められた自分の席なら全てが見れる。

皆、清々としていた。

決して闇に落ちた者の表情ではなかった。

やっぱり。

落ちたる背徳者など居やしない。真白は教卓で教科書を開く女教師へ視界を戻す。

信ずるものは何なのか。

それが真白と少女達を分かつ境界なのだ。境界は身体の距離を分かつ事は無いが、心の距離を確実に分かつ。真白と少女達の距離は余りにも近く、遥かに遠い。

黙想とは自身の内に在る信仰と触れる儀式。

少女達は目蓋の裏のあの闇に、光を見たのだ。深層から滲み、浮き出たものは心ではなく信仰なのだ。

怖くなった。

本当はわかっていたのだ。表情など見なくても、あの闇に怯える

者などこの場所にはいない。端からわかっていた。だが、それでも少しは期待した。自分と同じ様に、闇を、あの鏡を、不可視の像を、怯え畏怖する者が居るのではないかと。

だが背徳者は一人だけ。

怖くなった。日々の黙想が、怖い。自分は毎日、たった一人だけであの闇と向かい合うのかと思うと寒気がした。

窓から差す輝ける陽光は目蓋の裏には届かない。いや、届かないからこそ目蓋の裏に闇が出来るのか。真白は窓の向こうの光を見た。光が在ればこそその闇。昼が在ればこそその夜。太陽が在ればこそその月。

一対か、それとも一体か。

どちらにしても、

自分と少女達はどちらにもなれない。と思う。

しかしそれでも、この三年間を何とかやり過ごさなければならぬ。もう逃れられないのだから。

光か闇か。自分がどちらに溶けるのか。わからないが今は前を向こうと思う。進む事しか自分には許されていないから。それに、今は授業中だ。

真白は窓に閉じられた外の世界から視線を戻す。

だが、刹那。素早く横に流れた世界に、映った。

ああ、闇だ。

真黒い、闇だ。

真白は再び外を見る。

大きなグラウンド。その向こうの正門を見る。

門を潜る闇が在った。

少女だ。

真黒な長髪を揺らし歩む、少女だ。

闇は少女だった。

少女は細くすらりと伸びた肢体をその長き黒に隠し、悠然と学舎へ進む。

真白は意識を完全に奪われていた。少女を、闇を食い入る様に見つめる。

貴女は、

少女が近づいてくる。その顔が、闇から覗く顔が、見えた。

貴女は、人間なの？

闇を添えた少女の肌は光の様な白さだった。肌が目が眉が鼻が唇が、少女の顔を作る全てが 美しかった。少女の姿は、在り得ぬ程に美しく、それはまるで人形の様に完全だった。

少女は少女を見つめる真白には気づかず、悠然たるまま学舎の方へ姿を消した。

真白は少女が消えてからも動けなかった。いや、動きたくなかった。動けば少女が、あの闇が、白昼夢に成りそうだったから。

確かに在った。少女は確かに在ったのだ。

真白は、瞳を閉じた。

目蓋の裏には闇が在る。

真黒な闇の中に、確かに在る。

それは自分ではない。

他の誰でもない、あの少女が其処に在る。

真白は黙し、再び闇を想った。

? Correct and incorrect answers

私立アザレア女学園はキリスト基督教におけるカトリシズム普遍的理念の伝道を教育理念とし、幼稚園から大学までを有する内部進学式のエスカレーター宣教学校である。此処で生徒は神の御心を知り、人としての正しい生と在るべき心の形成を学び、不動な信仰と清らかな精神を抱いて社会へと巣立つていく。

真白はほのと共に高等部一年から学園へ外部編入した。

本来は共学である県立高校への進学を決めていた真白。しかし、それまで娘の進路に確たる意思を見せていなかった両親は受験季節の手前になってこの学園への編入を進めた。

そもそも自身の未来構築に一切の思想を持っていなかった真白は、両親の突然の希望に多少の驚き見せたが、然れども拒否はしなかった。

寧ろ、驚いたのはそれを聞いたほののその後の行動だった。

小中学校を共にした友は「ワタシもそこが良い」などと、自身の希望進路を隣の芝生は何とやらの精神でいとも簡単に変更した。

何と爽快だろう。ほのも自分と同じで一切の未来構築をしてない筈であるのに、他者の意思で歩む自分とは大きな差が有るのだと真白は思った。

そして入学式から早二週間。

真白は自他との根本的な違いに悩まされていた。

「……ああ、真白さん、其れは然したる問題ではありませんわ」

夏乃雪は小振りなお弁当箱に所狭しと詰められたサンドウィッチに手を伸ばす。しかし、楕円の箱と正方形に切り取られたパンが整

然となる筈は無く、更には容器容量を超過し、辻褃合わせに強引な詰め方をされたパンが主の指を通す隙間を作れるわけは無かった。

雪は何処から取るべきか伸ばした指を右往左往と宙にさ迷わせた拳句、

「全く。いつもの量を用意したは良いですが、詰める際にお気に入りのお弁当箱を落として割ってしまうなんて何と無様な事でしょう。代わりに用意したこの箱ではどうにも始末が悪いではございませんの。まあ良いですわ、一つ犠牲にしなければならぬと云うのでしたら……ええ貴女。貴女はほのさんの元で愛でられなさいな」

と言つて、雪は密集したパンの群れの端に人差し指を突っ込み、一切れをこれまた強引に取り出した。

「ほのさん、どうぞお好きになさつて」

さあ、と片側のパンが崩れたサンドウィッチを向かいに机を付けるほのに渡す。

「ちよつとちよつと雪ちゃん、いくらワタシが悪食だからってそんな残飯染みたサンドウィッチはいらないぞ。てか、少し詰める量を減らせば良かったんじゃないの？」

ほのは雪が差し出すぼろぼろのサンドウィッチを取らず、購買で買ったメロンパンを齧っている。机には他にも多々パンが並んでいた。

「あらあら残飯だなんて。これは見ての通りサンドウィッチですわ。ですから残飯ではなくて残パンですわよ」

「知らないよ！」

「それに、わたくしは一度定めた事柄を瑣末な事態でほいほいと変更したくはありませんの。そしてサンドウィッチは常にこの分量と定めておりますから、お弁当箱が壊れたくらいでその分量を変更するなんて以ての外ですわ」

「さようでございますか……」

そんな手前勝手な理由で強引に詰められ、詰められた拳句に邪魔だと弾かれたサンドウィッチを哀れに思ったのが、ほのは渋々ながらそれを受け取った。雪は、可愛がってくださいますと愉しげに微笑んだ。

「……あ、あの」

真白はそんな事より先が気になった。自分の暗鬱とした苦悩を、然したる問題では無い、と雪はそう言ったのだ。

問題では無い。いや、どう考えても問題だ。問題だから悩んでいるのだ。それをこの風変わりなお嬢様は問題では無いと言う。真白はその先を、その答えに到る経過しゅうごを知りたかった。

真白は箸を止める。小さな箱の中身は先程から変動してない。

「どうされました真白さん？」

「だから、話の続き……」

ああ、と雪は一つ消えて取りやすくなったサンドウィッチを取り、話を再開する。

「ですから、真白さんのお悩みは些事なものなのですわ」

「些事って……」

自分にとっては、いや、この学園にとっては大きな問題だと真白は思っている。だからこそ潰されそうなのだ。その拭えぬ澱に。

「ええ些事です」

雪は視線をほの右に傾け、其処に座る真白を見据える。薄茶色の虹彩に縁取られた漆黒の瞳孔が真白を捉え、拘束した。

「つまり真白さんは、自身が無信仰者で在る事を背德的だと卑下されておられるのでしょうか？」

明確、だと真白は思った。

夏乃雪との付き合いはこの学園に入ってからのもので、だからまだ十日やそこらの浅い関係であって、尚且つ、真白は雪に自分の悩みを上手く説明出来ていない。然れども雪は真白の言葉足らずで不明确的な説明を無駄なく繋ぎ、明確に紡いだ。偏に要領の良し悪しなのだろう。真白は常々自分の要領の悪さに呆れる。

「……ですが真白さん。無信仰それを卑下する事はありませんし、頭を抱える事でもありませんわ」

雪は何とも云えぬ柔らかい表情を見せる。

「でも」

キリスト
カトリシズム
基督の教えが、普遍的理念が真白を説く。信仰の果てに光を見よ

と真白を急ぎ立てる。

「真白さんは勘違いされておりますわよ。宗教とは強迫観念では在りません。宗教とは何かしらの主体に対して分岐した意識を一つに統一する事です」

「統一？」

「ええ統一です。まあこれはあくまでわたくしの定義ですけど、宗教における最終目的は一への到達なのです」

「一、って何？」

「一とはですから意識の事です。簡単に言いますと、ええ、例えばこのサンドウィッチ」

雪は手に持ったままの一切れのサンドウィッチを真白に向ける。

「真白さんはこのサンドウィッチについてどう思われますか？」

「え？ ええと、た、只のサンドウィッチです」

我ながら何と無様な表現だろうと思った。

「では、ほのさんはどう思われますか？」

雪は次いで手を、サンドウィッチをほのに向ける。

ほのはそれまで黙々とパンを齧っていたので、いきなりの振りに少し戸惑いながらも、

「う、うん。は、ハムサンド！」

と答え、空になったパンの袋をくしゃくしゃと潰した。

「ええ、まあハムサンドですわね。ハムがサンドされておりますから」

へへ、当ったり。と、ほのは鼻を鳴らし次のパンの袋を開けた。ビニールの裂ける音が昼休みにも拘らず何故か授業中の様な静寂が包む教室に響いた。

「ですが、これはサンドウィッチなのですわ」

「うん？」

ほのは首を傾げた。

「これはサンドウィッチと云う料理で、ハムサンドと云う種類なのです」

「ああ」

雪が何を言いたいのか、その先が真白には少しわかってきた。

「この、パンが具を包む料理を真白さんはそのまま料理名、ほのさんは種類名を答えた。どちらも間違いではありませんわね。さらには、同じ質問をもつと複数の他者に聞いた場合、もしかしたら答えは今の二つ意外にも出てくるかもしれません。捻くれ者でなければ、恐らくその出た答え全てが正解でしょう。ですが、この質問の正解を真白さんが答えたサンドウィッチ一つに絞る事になったら、ほの

「さんはどうします?」

「うづん、悲しい」

「悲しむ事はありませんよ、間違っ^ていても貴女を責めはしませんから。ですが、もしほのさんがこれをサンドウィッチなのだ、と、理解できれば、いえ、少しでも信じる事が出来たなら、貴女は世界と一つになれる。そう思いませんか?」

「なれるなれる。だってそれが正解なんですよ?」

「なるほど　それが」

「そう、これが宗教です」

雪はサンドウィッチをぱくりと一食いにした。

「……つまり、まず何かしらの主体があつて、それに対しての考え方が考える人の数だけ分岐しているから、一つの正解、いえ、一つの意識に導くのが宗教であり、導く為の言葉が教えとなつて、その言葉を信じた人達が信者つて事だよね」

真白は自分の中で辛うじて纏まった言葉を矢継ぎ早に紡いで雪に送る。

「素晴らしいですわ真白さん。その通りです。ですが先にも言った通り、これはあくまでわたくしの定義ですので、真白さん達までこの考えに縛られる必要はありませんわ」

宗教の定義はそれこそ各々違いますから。と雪は結んだ。

「ワタシはさっぱりわかりません！」

くしゃくしゃと、ほのは最後のパンの袋を丸め、ワタシもそういや無信仰者だった、と何故か高らかに笑った。

「ええ、それで良いのですよ。結局、わたくしが何を言いたいのかと申しますと、宗教とは脅迫ではなく共有なのですから、その共有を行うか行わないかは人其々なのですよ、と言う事ですわ。ですから、たとえ宣教学校へ入学したからと云って、必ず信仰を持たなければいけない、なんて事は無いのですよ。ほのさんの様に、わからないと答えを持たぬのもそれはそれで良いではありませんか？」

「……そう、なのかな」

雪の雄弁な説明に理解は出来たものの、真白は何処か納得は出来ないでいた。

「まあ、どうしても答えを探したいのでしたら、そんなに思い詰めずにゆっくりと探していけば良いですわ」

高等三年、人生は云十年も有りますから。と雪は微笑んだ。真白はその笑みで少し心の澱を払拭出来た様な気がした。雪に、うん、ありがとう、と返し、止めていた箸を動かす。詰まった箱が空になっっていく。そして、

かつん。

廊下で鳴った誰かの足音に耳をとられた。誰かが教室に近づいてくる。

開け放たれた扉から見える廊下を注視する。其れ程までに、何か異様だった。

かつん。

ああ、あれは、朝の、
少女が教室を横切る。

かつん。

闇だ。

黒い長髪が、少女の爽快な足音を追って靡いていく。

少女は直ぐに教室を横切り、消えた。

真白はまた動けなくなった。朝と同じ。

「今の人、綺麗だったね」

ほのが言う。見ていたのだろう。

「ああ、あの方はパーフェクト・クレンリー完全清潔淑女こと

せきつきせり戚月世理様、ですわ」

雪が言う。

真白の意識は、完全に奪われていた。

? Connect

パーフェクト・ケレンリー
完全清潔淑女。

曰く、この学園には風変わりな習慣があるとの事だ。

「此処では、生徒が生徒に特殊のあだ名を付けるのです」

雪によると、その習慣がいつ頃から始まったのかは定かではないが、毎年必ず誰かが誰かにそう云うあだ名を付けるのだと言う。

「そのあだ名付けに細たる決まりは無い様なのですが、誰彼構わず付けると云う訳でもありませんの」

付けられるのは特定の生徒のみだと言う。

「特定って、選定基準は何なの？」

選定と云うのも何だか仰々しいと、真白は自分で言うて少し可笑しくなった。

「まあ、特定するにはその手前に必ず選定があるのでしょうか……どうでしょうね、わたくしも実のところあまり詳細を知らないのです。……ただ」

あだ名を付けられる生徒は皆、癖者揃いなのです。と雪は苦笑した。

そして、あの真黒な闇を携えた少女 戚月世理もまた一癖在る

人間らしい。

「あの方はわたくしが所属しております弓道部の部長なのです。ですから彼女の事なら、あだ名を付けられた他の方々には比べれば多少なりともその人間性を存じ上げております。……聞きたいですか？」

雪は厭らしい表情を浮かべ、真白に問うた。

見透かされてる。真白は瞳と同じ薄茶色の髪を上部でお団子に纏めた友　夏乃雪も十分に癖者だと思った。

「……ううん、別にいいや。わたしとは今後係わり合いが無さそうだし」

正直にそう思う。

可憐な容姿と妖艶な雰囲気。人形のように完全な美貌を持つ少女。その魅力が、その神秘性が、何よりも近づき難い、と真白は感じていた。

気高すぎる。

自分は端からこの学園の澄んだ世界から外れているのに、その澄みをさらに澄ませている様な神秘と、澄みを墨で濁す様な外れた背徳者が繋がるわけが無い。

「繋がりとは些細な切っ掛から生じる事も御座いますわよ」

縁は異なるもの味なもの、らしいですから。と雪は笑う。

「それと、ご自身を外れ者などと卑下されないように。昼休みにも言いましたが、たとえ無信仰と云えど、それでこの学園から外れるわけではありません。信仰者と無信仰者を分ける差など一切御座いませんのよ。皆、只考え方が、生き方が違うだけ。完璧な者など居

やしない。完全な者など有りやしない。違いは在れど、差など無し」

雪は崩れてもいない頭のお団子を整える。

「それに、此処の生徒達は真白さんが思っておられる程、純粹無垢では御座いませぬのよ。特殊ではありますが、あだ名付けにしたって学生らしい平凡な児戯ではありませんか。皆、少しだけ神様を信じているだけの未熟な少女達なのです」

わたくしも、ね。と雪は結ぶ。

知的かつ雄弁なこの友が未熟なら、自分は何なのだろう。雪は人に差など無いと言うが、同じ歳月を生きて答えを出せぬ自分と答えを出せた雪の間に在るものこそ、差なのではないのか、と真白は思う。理を知る者と理を知らぬ者。確たる差が、其処には在るのだ。

「なんて、下足場で長々と話す内容ではありませんでしたね」

可笑しい、と雪は上品に微笑んだ。

時刻は十六時三十五分。

授業も終わり、生徒に許されるのは下校か部活動。未だ部に所属していない真白にとって、放課後は選択肢無し即下校なのである。しかし、ほのほの既にやりたい部活動を定め活動している。文化部の為、運動部の雪の様に下足場まで連れ添う事は出来ず、教室で別れる形となってしまう。いくら寂しさはあるが、下足場までは雪が居てくれるので、まだ救われる。

雪とは教室から下足場までの短い距離の中、いつも今日の様な密度の濃い話しをする。しかし大体が真白の疑問やら不安やらの内容の為、理を知らぬ真白を説くのにそこまで密度が濃くなってしまうのだろう。余りにも密度が濃いと話し上手な雪であっても下足場までの距離で完結させる事が無理な様だ。そういう時は今日の様に下

駄箱に背を預け、完結まで語り合う。良く考えれば部活のある雪にとっては傍迷惑な事だろう。しかし、雪は最後まで真白の話に付き合ってくれる。出合ってまだ十日程度の付き合いなのに、既に雪は真白にとって掛替えの無い友人と云えた。

「さて、わたくしはそろそろ行きますわ」

雪は下駄箱から背を離し外靴に履き替える。

「ああごめんね、今日も話しが長くなっちゃったね」

「構いませんよ、友とはそう云うものですから。それに、いつも話を長くしているのはわたくしの方ですからね」

雪はとんとんとつま先を地面に打ち、靴を整える。

「では真白さんまた明日お会いしましょう。車にお気をつけてお帰りくださいまし」

「うん、ありがとう。雪ちゃんも部活頑張ってるね。あ、今度良かったら見学に行っても良いかな？」

「ええ、いつでも構いませんわよ。その時はわたくしから部長と顧問に話しを通しときますから」

部長。 戚月世理。

真白は少しどきりとした。

「繋がりとは些細な切っ掛けですから」

「またも真白の心中を見透かした様に雪がにやける。真白は、雪ぢやんのいじわる、と頬を膨らませた。
ふふふ、冗談ですわよ。ではまた明日。と雪は淑やかな仕草で下足場を後にした。」

「……縁は異なるもの味なもの」

夏乃雪との出会いも味なものなのかも知れない、と真白は心中で微笑んだ。

真白も外靴に履き替え玄関に向かう。

其の時。

「……ねえ、其処の貴女」

澄んだ空気に溶け込むさらに透明な声。

真白は振り向く。

あ。

間。いや、パーフェクト・クレンリー完全清潔淑女。いや、

戚月世理。

後ろに、下足場と校内の境に、彼女が居た。

真黒な長髪。純白の肌。すらりとした肢体に、切れ長の瞳。

真白は、世理の姿を視認した瞬間、またも停止してしまふ。

「ねえ、貴女。貴女は一年終組の生徒よね？」

世理は真直ぐ真白を見つめ、内履きのまま近づぐ。真白は心臓だけが激しく鼓動し、身体は全く動かなかった。

「……私の声、聞こえてるわよね？ 知ってる？ 聞こえていて返事をしない事を無視するっていうのよ」

「あ、あの、す、すみません、そんなつもり」

世理の睨め付ける様な眼差しに咄嗟に唇が動いた。だが震えていて上手く発音出来ない。

「つもりが有ろうと無かろうと、受け取る人間がそう思えばそうなのよ。まあ良いわ、質問に戻るけど、貴女一年終組の生徒よね？」

「は、はい、そうです」

「そう、やっぱり。夏乃さんと一緒に居たからそう思ったただけだよ、当たりみたいね」

世理は睨みを解き、何故か嬉しそうに笑った。

「あの、わ、わたしに何か御用でしょうか？」

「貴女に用なんて無いわ。ただ貴女が一年終組なら、これを主に返して欲しいの」

そう言っつて世理は右手を真白に向ける。その手には一冊のノートがあった。ノートは変哲も無い、書き取り用のノートだった。

「これ、其処の廊下に落ちていたんだけど、名前のところに「丁寧」に一年終組って書いてあったから、貴女の組の誰かなのでしょう？ なら貴女が届けなさいな」

世理は雑にノートを真白に手渡す。

「名前が書いてあるのは良いけど、私は其れが誰だかわからないの。貴女ならわかるでしょ？ あ、もしかして貴女の物かしら？」

ノートには由為よしな莉香子りかこと書いてあった。

「いえ、わたしのでは、無いです」

「そう。なら届けてあげて」

「はい、わかりました」

真白はノートの持ち主である由為莉香子を知らない。しかし明日、雪に聞けばわかるだろう。

其処で真白は端と気づいた。

何故、彼女はわたしに渡したのだ？

彼女が部長を任されている弓道部には雪が居る。其の為、雪の事も知っているのだ。ならば一年終組か定かではなかった真白に渡すより、弓道場まで持って行って雪に渡した方が確実だった筈だ。

「どうしたの？」

「あ、い、いえ、何故、雪ちゃ　夏乃さんじゃなくて、わたしに渡したのかな、と」

「ああ、だって　弓道場に行く前に忘れそうだったからよ」

世理は何の悪びれも無くそう言った。

「本当は夏乃さんに渡そうと思ったのだけれど、声を掛けようとしたらさっさと玄関を出て行ってしまったのだもの。だからまだ残っ

ていた貴女に頼んだのよ」

理に適っている様で、どこか噛合わない、と真白は世理の淡々と語る表情を見た。

「そついうわけだから、お願いね」

と言ひ残し、世理はふわりと靡く黒髪を連れて去って行った。

「……………あれが完全清潔淑女」
パーフェクト・クレンリー

わたしとは今後係わり合いが無さそうだし。

繋がりとはい些細な切っ掛から生じる事も御座いますわよ。

本当に、些細な事だった。呆れる程に。

真白の心臓は未だ激しく鼓動している。

気づけば両手が震えていた。受け取ったノートを落とさない様に鞆に仕舞う。仕舞う時にふと思ひ出し、ノートを見た。

あだ名を付けられる生徒は皆、癖者揃いなのです。

「……………本当だね」

真白は今度こそノートを仕舞う。

世理がハンカチを使い直接触れない様にしていたノートを。

? Temporary sewing

翌日、真白は由為莉香子を探した。

世理から預かったノート。その所有者である由為莉香子は真白と同じ一年椿組の生徒らしい。ノートにも確かに一年椿組と書いてある。真白は始業前はまだ落ち着いてない教室をきよろきよろと見渡す。

しかし、真白は由為莉香と云う人物を知らないので、見渡したところでその行為に結果が伴う事は無かった。

次々と教室へ入る少女達。春とはいえまだ朝の空気は冷たい。誰も艶めくその白肌を紅色に染め上げていた。その中に由為莉香子は居るのだろうか。居たとしても真白にはわからない。わからないのに、真白は少女が一人、また一人と教室に入って来る度ついつい探してしまう。無意味とは重々承知しているのだが、如何にも落ち着かない。早く手元のノートを返して開放されたかった。

何から？

それもわからない。しかし、何とも云えぬ焦燥を真白は感じていた。それは何に起因するものなのか、そもそも起因など在于るのか、そんなあやふやで、地に足がついていない様な感覚だった。

「うきげんよう真白さん。……どうされました？」

雪だった。

雪は真白の真後ろの自席に鞆を置いてから、真白の顔を覗き込む。

「お、おはよう、雪ちゃん。どうって、何が？」

「体調が優れませんの？ 何だか呆としていましたわよ」

「うっん、大丈夫だよ。ちょっと考え事していただけ」

そうですか、なら安心致しましたわ、と言って雪は席に座る。

真白は着席したまま体を少し後ろに向け雪に問うた。

「雪ちゃん、由為莉香子さんって誰かわかる？」

そもそも、始めから雪に頼る算段だった。故に先程の行為の意味も意義もやはり在りはしない。ただ、如何にも落ち着かない心を誤魔化しただけだったのだろう。真白はそう思った。

「由為莉香子？」

この学園には似つかわしくなく、呼び捨てである。

「ええ、存じておりますけど、彼女が何か？」

雪は、まさか真白さんの口から由為莉香子の名が出てくるとは思いませんでしたわ、と何とも云えぬ表情を作った。

真白はノートの件を伝えた。

「成程、そう云ったご事情でしたか。ええ、そう云う事ならご協力致しましょう」

どう云う事情なら協力しなかったのだろう、と真白は気になった。だが特に言及はせず、礼だけ述べた。

「由為莉香子は、ほら廊下側の席、前から二番目に座っているポニ

「テーラーの子が居ますでしょうか？ あの子が由為莉香子ですわ」

真白は雪が指差す席を見る。

ポニーテールの少女。由為莉香子。

莉香子は席に着き読書に耽っていた。その顔は一言で言うところの知的で、大人しそうな印象と線の細い雰囲気がある。その後を追っている。

真白は莉香子の姿を確認し、嘆息する。

予測はしていたが、その予測が当然で在る様に的中するのは如何にもやりきれない。

真白の予測通り、莉香子もまたこの学園の空気に溶け込める様な清々とした淑女だったのだ。

雪に何度となく説かれても、真白の中に在る他者との差異によって生じる自らへの懐疑心は中々薄まってくれない。

入学から二週間。真白は学園の生徒と上手く意思疎通出来ていなかった。

未だ友と呼べる者はほのと雪以外に居らず、その雪すらもほの中心に居た事で結べた、云わば借り系の絆なのである。

腰が重い。

真白は静かに本を読む莉香子を遠く離れた自席から目視しているだけである。中々腰が上がらない。接触したくない。接触してはいけないのではないか。接触すればきつと汚してしまう。そんな事、在ってはいけない。関わっては駄目だ。結んでは駄目だ。汚しては駄目だ。近づいては駄目だ。近づいたら、

壊して、しまう。

澱に沈んでいく、感覚だった。

「……真白さん？」

いつまでも動かぬ真白に雪が不安そうな声を掛ける。

「大丈夫ですか？　もしかして、また何か、ご自身を縛っておられるのではないですか？」

縛。檻。澱。出られない。出てはいけない。出れば、その深層に在る自分まで出てきてしまつかも知れない。だから

「真白さん！」

雪が声を上げた。

真白はその声にびくりと体を震わせ、雪を見る。雪は怪訝な表情を浮かべ真白を見ていた。

「……あ、ご、ごめん。また、考え事」

「もう考えないでくださいまし！」

雪は強い口調で真白の言葉を遮断した。

「ゆ、雪ちゃん？」

「……驚かせてしまい申し訳ありません。ただ、真白さんは少し思考を停止させた方が良いでしょう」

雪は強張っていた表情を緩ませ、いつもの優しい顔になる。

「思考を、停止？」

「ええ。貴女は如何も、ご自身の内に無信仰に因る葛藤以外のものを潜ませている様ですね」

「どう云う、事？」

「お聞きしたいのはこちらなのです。真白さん、貴女は心の奥に一体何を封じておられるのですか？」

「何を、言ってるの？」

「無自覚、と云う事ありませんでしょう。貴女は確たる意思の下に其れを封じている様に思える。ご自身の無信仰に因る葛藤が生じさせた他者との差別化。しかしそれは無信仰に因るものではない、のではないですか？」

「……」

「……凶星、ですか」

凶星も凶星。雪の予想は見事に中心を射抜いていた。

「しかし、貴女の内になんなものが眠っていたとしても、わたくしと真白さんの関係は微塵たりとも変動致しませんわ。もっと心を開いて、何て事も言いません。わたくしと貴女は既に、友、と云う系で繋がっている。繋がっているのだから、それ以上を望む事も、それ以下に失望する事も在るわけがない。いや、在ってはいけない。友とは本来、その様なものであり、そしてそれで十分、ではありませんか？」

雪は微笑む。

真白は言葉が出なかった。

「何を隠したいのか、何を封じているのか、何を縛りたいのか、そ

それは貴女にしかわかりません。ですから大きな事は言えませんが、それでも、わたくしは貴女に敢えてこう言いたい」

雪は僅かなの間を開けて、

「大丈夫、ですよ」

真白の感情が、揺れた。

「大丈夫、貴女は間違った人間などではない。寧ろ間違いがわかる人間だとわたくしは思います。ですから、たとえ相手がどんな人間だろうと、本当の貴女のまままで接していけば良い。それでもやはり抵抗があるのでしたら、隠したまま接すれば良いではありませんか」

「……隠した、まま？」

真白の声は消え入りそうな程に細く、微弱だった。

「ええ、隠したまま。と云うより、人間は誰しも自身の一部を隠しながら生きていますよ。寧ろ剥き出し、あけっぴらに他者と接せる人間の方が珍しい。それが普通なのです。ですからそんな事で悩まなくても良いのですよ。自分を縛る縄や檻など無用の長物。人間、隠したいものは必然的に自然的に無意識的に隠すものです。それを意識的に隠そうとすれば真白さんの様に自分自身への不要な懷疑が生まれてしまう。そう云う思考は不毛なだけですわ」

それ故、雪は真白に思考を止めると言ったのだらう。心の秘匿は無意識で生じるもの。いや、心の裏に在るもの全てが無意識に秘匿したものだ。しかし人間は無意識の状態より意識の状態での行動が主体となる。その為、心の裏側の現状は意識的状况下で投げ込

まれ追いやられたもので溢れているのだ。だが意識的に裏へ追いやれば、人間はそれを善悪で分けようとする。善悪を定めれば、次いでその善悪に対し懐疑心が生じる。

わたしは、汚れてる。

秘匿した心の一部に罪悪感を感じ、悪とする者。秘匿した気持ちの一端を他が為故に、と善にする者。懐疑の果ての最終的結論は三者三様、十人十色であるが、結局のところ、そのどれもが間違いなのだ。

善悪の分別など不要。懐疑を生む思考など不毛。秘匿したいものは、そもそも自分の知らないうちに心の裏側へ追いやられるのだから。

そう説く雪の言葉が、縄と檻、そして澱が錯雑とさせる真白の内に、迷わず惑わず絡めとられず、真直ぐと届いた。

本当に、同い年なの？

其れ程までに、夏乃雪と云う人間の言葉は熟していた。

「それと」

雪の説教はまだ終わっていない様だ。

「本心と本質は違うのですよ。本心とは心の全てなのです。心とは裏も表もひっくりくるめて心。その裏に何が隠されていて、その人の心はそれで心なのです。よく、本心を聞かせて欲しい、などと言われる方が居られますが、それは愚の骨頂。何度も言いますが、本心とは裏と表が在って成り立つものなのです。まあ稀にその裏すらも表と同じもので成り立っている方も居られますがね」

ほのさんとかその類タイプですわね、と雪は優しい表情のまま、可笑しそうに笑う。

「そして本質とはその者を成り立たせる性質。気質とも云いましょうか。とにかく本質とはその者がその者で在るのだと云う、一切揺るぐ事の無い、存在の真理、なのです。心は常に動きます。しかし本質は絶対に動かない。そして、真白さんは本心の方に問題を抱えているのです」

「本心……」

「ええ。そしてそれは不幸中の幸い。心の問題など、如何にでも為るのですわ」

雪は心の問題、そのどれもが至極簡単に改善できる、と言う。

「先程も言った通り、貴女がどの様な人間で在れ、その心の裏に何が在ったとしても、わたくしと貴女の関係は変わりません。隠していなら隠せば良い。それが普通なのです。ですから隠した事に罪悪感など感じず、思考するのも止め、堂々としていれば良いのです。簡単です。簡単過ぎて吃驚でしょうが、心など所詮、そんなもん、なのです」

「でも、わたしは……」

自分が隠しているものは

「全く、分からず屋ですわね！　こんなに手のかかる娘、初めてですわ！」

雪は小さな顔の小さな頬を膨らませる。

「う、ごめんさん」

言ったが、何に対しての謝罪なのか真白自身、良くわからなかった。

「なら、ごうしなさいな。此処の生徒達と接するのに抵抗があるなら、その接触自体を仮縫いと思いなさいまし」

「……仮縫い？」

「結んで結ばず、仕上がる事無く形を作る。まあ、もっと簡単に言えば、仮初めですかね」

「……偽ったまま、浅い関係で良いってこと？」

「その通り。と云うより人間の関係なんて仮初めから始まるものですわよ。真白さんは何でもかんでも深く考え過ぎなのです。もっと物事を適当に捉えなさいまし。まあ、ほのさんの様に何でもかんでも適当ではいけませんけど」

全く、貴女とほのさんは足して二で割ったら丁度良いですけど、と雪は溜息をつく。

「とにかく、誰しも彼しもと友達になるわけでは無いのですから、適当に接したら良いのです。そんな事で誰も傷つきませんわ」

「……うん」

「それに、今思えば高々ノートを返すだけではありませんの。そんな事でこんな長々と会話している事自体変てこですわ」

しかも、相手は由為莉香子……ああ、腹立たい！ 雪はその由為莉香子の方を、きつ、と睨みつける。

「ほら、さつさとお返しなさいな。仮縫い仮縫い。適当適当。所詮仕上がりらぬ一時的な糸ですわ。まだ、わたくしと真白さんを結ぶ借り物の糸の方がましですわね」

真白は途端赤面した。

雪は其処まで、読み解いているのだ。

自分が恥ずかしい。

体は火照っているのに、肝は冷えた。

「返さないならわたくしが代わりに返してきますわよ？ 間もなく授業も始まりますし、そもそも戚月部長はわたくしに渡す積もりだったのでしょうから。まあ、由為莉香子のノートなんて此処からブン投げてやりますけどね」

雪と莉香子は不仲な間柄なのか。先程から雪の莉香子への態度は些か可笑しかった。

「……いや、大丈夫。自分で行くよ。折角雪ちゃんに説いて貰ったんだから、無駄にしない様に、ええと、仮縫いだっけ？ うん、頑張ってくるよ。それに、戚月さんが最終的に頼んだのはわたしだから」

其処で、真白は端と気づいた。

ああ、だからわたし、そわそわしてたんだ。

早く開放されたい。

あの焦燥感の正体が、わかった。

それは、生徒との接触を避けたいからではなく、

貴女が届けなさいな。

それは、彼女のたった一言に因るものだったのだ。

戚月世理。完全清潔淑女。パーフェクトクレンリー

彼女が頼んだのだから、絶対に果たさないといけない。

真白は、そう感じていたのだ。無意識に。

「……………」

真白は席を立つ。

「お気をつけて行ってらっしゃいまし」

雪は如何にも笑っているようだ。真白は振り返らずただ、ありがとう、とだけ言って莉香子の席へ向かった。

「……………」

そして莉香子の前に立つ。

声が震える。

仮縫い、仮縫い。

浅く、偽りの関係。だから彼女を汚す事は無い。真白は自分に言い聞かせた。

「……………」

読書に夢中なのか、莉香子は応えない。ただ黙々とページを捲る。

「あ、あの！」

真白は思い切って声を上げた。

「 な、何、ビックリした！」

突然の真白の大声に驚き、莉香子は思わず持っていた本を床に落としてしまった。

「あ、ご、ごめんなさい。そ、そのわたしは、ただ、ノートを返したくて」

真白は恐る恐る、手に持つノートを莉香子に向けた。

「こ、これ、パーフェ じゃない、戚月さんが拾ってくれたみたいで、その、わたしが返すように言われたから」

上手く言葉に為らない。差し出す手も小刻みに震えていた。情けない。こんなんじゃ、笑われちゃう。

「 はっはー！」

莉香子は豪快に笑った。

真白は一瞬、何が起きたのかわからなかった。

「はっはっは！ ノート落としてたって？ こりゃ間抜けだ！ はっはっは、貴女も笑いたまえ！ 可笑しい！ だってノート落としてたんだぜ？ そんな事ってある？ いや無いね！ 故に傑作！ ぷぷっ」

「 ！」

莉香子の豪快な笑い声は静かな教室をこれでもかと轟かせた。真

白はもう何が何やらわからなくて、ただただ停止している。

「いやあ、ありがとありがと。全然気づかなかったよ」

「……い、いえ」

「……全く、貴女は何処にいても嬉しいですね」

振り向くと、雪が居た。

雪は真白を見ずに、ただ莉香子を睨みつけていた。

「おお、夏の雪！」

雪の牽制空しく、莉香子は軽い調子で雪に応える。

「夏乃雪、ですわ。全く、真白さんが固まっているではないですか。とっととその汚いノートを受け取って開放してあげなさいまし」

「うん？ ああ、おお！ 了解！」

莉香子はこれまた豪快に真白の手からノートを受け取った。

「……真白さん、大丈夫ですか？」

ノートが無くなり、空になっているのにも関わらず、真白は手そのままの状態で硬直させている。

「……可哀想に。きっとこのお馬鹿を淑女か何かと勘違いされていたのね。ああ、嘆かわしい」

「お馬鹿って何だよ。あたしは知的キャラで通してるんだ。そんなに大声でお馬鹿お馬鹿と言わないで欲しいね」

「ああ、お馬鹿ですわ。全くもってお馬鹿ですわ。さ、真白さん、このお馬鹿と関わると真白さんまで可笑しくなってしまうから、もう戻りましょう」

雪は固まった真白を強引に引っ張り席に戻そうとする。

「……あ、ゆ、雪ちゃん待って、本が」

真白が驚かせて落としてしまった本。そのままにして戻るのには如何にも無礼である。真白は雪の手を解き、本を拾う。ページが何枚か捲れた。

『あっ』

雪と莉香子、同時に声を上げた。

「……え、ええ、な、何これ！」

開かれたページに描かれていたのは男の裸。

真白の受けた精神的衝撃により、本はまたも床に落とされた。

「はっはっは！ 見られたか！ 見られてしまったか！」

「笑い事ではありませんわよ！ 真白さん、今の光景を直ちに記憶から消去しなさいまし！」

「……裸が、男の人が……裸で、裸で抱き合って」

「駄目です真白さん！ そちら側へ行つては、駄目です！」

「はっはっは！ 男同士の鬼気迫る小突き合いは何と美しい事か！」

「だまらっしゃい！」

「こ、こ、こ、突き合い」

「真白さん戻つて来てくださいますし！」

「はっはっは！」

始業のチャイムが鳴つて、

真白と由為莉香子の仮縫いは、何とも異様な本縫いと為り、仕上
が
つ
た。

? Sexual love

「あたしは帰宅部だ」

莉香子は自分の下駄箱から外履きを取り、地面に放り投げた。人工皮革であろうダークブラウンのローファーは、かこん、と小気味良い音を立てて地を跳ねる。

「……はあ」

「誰もそんな事聞いていませんわよ」

雪は莉香子とは反対に一切音を立てる事無く靴を地面に並べる。

真白も雪を見習い丁寧な仕草で靴を置いたが、僅かに、こん、と爪先が鳴った。

「いやいや、これは重要な事だ。帰宅部員にとって、志を共にする同じ帰宅部員との部活動は中々出来るものではない。見知らぬ部員には近づき辛い。しかし見知った友は他の部活動員。故に、見知った友が同じ帰宅部ならば、そう、そこにはとても重要な意味が生じるのだ」

莉香子は転がり裏返しになった靴を右足で器用に表へ戻し、履く。

「……はあ」

真白も続き、両の足を靴に通す。

ちよつと、小さくなつたかな？

中学一年生から履いているローファー。最近、踵を通す時に若干詰まる。真白は、とんとん、と地面で爪先を打ち、整えた。

「ようは貴女、真白さんと一緒に帰りたいでしょ？」

雪は既に靴を履き、玄関口まで歩いてきた。

「うん！一緒に帰ろう！」

「……はあ」

真白も雪に続き玄関口へ向かう。歩く度、踵に圧迫を感じる。今朝はそんな事も無かった。だが、一度そうだと認識してしまうとその後は認識に囚われ続け、認識前の状態に戻す事は困難である。

「やった、じゃあ帰ろう帰ろう」

帰宅相手の獲得に成功した事が嬉しかったのか、莉香子は白い歯をこぼす。

「強引ですわね。それに貴女、真白さんが帰宅部だと誰から聞いたのですか？」

帰宅部、帰宅部と何度も言わないで欲しい。何だか責められている様に思える。

確かにこの学園では部活動を行わない生徒は少ない様だ。そう、いつぞや雪が言っていた。あれは新入生部活動紹介の際だったか。良く覚えていないが、確か、何処の部活に入部するか雪に問われた。だが真白はまだ決めれないと答えを伸ばした。部活動を行いたくな

いわけではなく、その時は本当には決めれなかったのだ。そして答えを伸ばし誤魔化し、今日まで至る。

運動が嫌いなわけでも、文芸が不得手なわけでもない。

ただ、結局は、近づきたくないのだ。

教師が仕切る授業と違い、部活動は生徒が主体となる為、必然的に、直接的接触が生じる。それが嫌なのだ。

部活動に問題は無い。問題は接触。学園の生徒との、繋がり。

真白はどの部活に入るか迷っているのではなく、そもそも入るか入らないかで迷っているのだ。

答えはまだ出そうになかった。恐らく、ずっと出ないだろう。

いや、責められても仕方ないか。

真白は二人に聞こえぬ小さな溜息を零した。

「誰にも聞いてないよ？ ただの、勘。てか、勘でもない、流れ？」

「何の流れですよ。とにかく、真白さんはこれからわたくしと共に弓道部に向かいますの。ですから貴女は一人寂しく帰路を歩きなさいな」

「え、そうなの？」

いや、知らない。そんな約束をした覚えはない。

真白は雪に視線だけで問う。

「あら、真白さん昨日仰られていたではありませんの」

昨日。

今度良かったら見学に行っても良いかな？

ああ。

言った。確かに言った。

しかし今日行くとは言っていないし、雪から今日行こうと誘いがあつたわけでもない。

それに、あれは真白にとって上辺を飾る挨拶でしかなかった。行く気などない。行ける筈がない。行けば接触してしまう。生徒と無意味に繋がってしまう。

戚月世理、なら？

真白は闇を浮かべる。脳の片隅。暗い暗い深遠の底から。あの闇を、浮かべる。

「そつか、なら仕方ないね。今日は一人で帰るかな」

「そうしなさいまし。さあ真白さん、そろそろ行きましようか」

駄目だ。

彼女でも、いや、彼女こそ、自分が接触してはならぬ存在だ。自分が壊してはならぬものだ。

真白は闇を沈める。再び、深遠へ。

「ごめん雪ちゃん、今日は止めとくよ」

「え？」

雪は予期せぬ答えに戸惑う。

「今日は由為さんと帰るね。折角誘ってくれたのに、ごめんね」

「いえ、それは構いませんけど……」

雪はすつ、と真白に近づき莉香子に聞こえぬ様、耳打ちする。

「……本当に宜しいの？ 由為莉香子との深い接触こそ、危険ですよ？」

どうやら莉香子との帰宅を避けさせる為に雪は機転を利かした様だ。

嘘も方便、でしたのに、と言って雪は真白から離れる。

如何にも雪と莉香子には浅からぬ因縁が在る様だ。しかしそれは真白には関係のない事だし、由為莉香子と云う人間との接触は問題ない様に思える。

莉香子は、ほのに似ていた。

まだ知り合つて数時間しか経ってないが、その性質は所々の瞬間に彼の親友を髣髴ほっふつとさせるのだ。

だからこそ大丈夫なのだと言えば莉香子に無礼であるうが、それでも、真白はそう思った。

「ごめんね、雪ちゃん。そう云う事だから、見学はまたの機会にお願ひするよ」

それと、ありがとね、と小声で付け加えた。

「了解致しましたわ。ではお気をつけてお帰りくださいませ。其処の変質者は如何でも良いですけど」

「変質者とはあたしの事かい？」

「貴女以外誰が？」

「いないか！ あはは！ 莉香子は豪快に笑い、

「じゃあな冬の蝉」

と言って玄関を出る雪に手を振った。
雪は振り返る事無く、下手っぴ、とだけ短く返して弓道部へ向かった。

「んじゃ、帰りますか」

「……ええ」

正門を潜り、緩く延々と伸びた坂道を下る。
沈みいく日の紅が何とも眩しかった。

「……そっぴや真白ちゃんは中等部一年の時、何組だった？」

莉香子も夕日が眩しいのか、目を窄め、真正面の夕日から若干、視線を右隣を歩く真白の方に向けて問うた。

「中等部？ あ、わたしこの学園には高等部からの編入なの」

「え、そうなの？」

莉香子は何故か意外そうな顔をする。そもそも莉香子が何を聞きたいのか真白にはわからなかった。

「うーん、そうなのか。じゃああたしの勘違いかな……」

「勘違い？」

「いや、良いんだ。やっぱりあれは白昼夢だったんだから」

勘違い。

白昼夢。

意味がわからない。

説明する気は無いのか、莉香子は両腕を紅に染まる空へ真直ぐ伸ばし、大きな欠伸をしている。

「……あの、意味が」

わからないと言い掛けた所で莉香子は遮った。

「あ、そうだ。真白ちゃんはえっちい本とか好き？」

「……は？」

話しが飛んだと云うより、話の次元そのものがぶっ飛んだ。

「いやあ、あたしは大好きなんだけどね」

「……」

知った事ではないし、知りたくも無い。知ってしまったけど。

「うん。普通のも好きなんだが、やっぱり男同士が一番好きかな」

本当に知った事ではない。

真白は答えず遠景に燃ゆる紅を見た。

やはり、眩しい。

「君は同性愛をどう思う？」

真白は反射的に紅から莉香子へ視線を移した。莉香子は真白の代わりに紅を見ていた。艶のある黒髪が紅を反射している。

同性愛。

昨今では聞きなれた言葉であり、さして珍しい単語ではない。

だが、舞台が女学園であれば、それは途端に生々しい響きに変わる。

「……どう思うって言われても、わたしは同性愛者じゃないからわからないよ。ただ偏見も軽蔑もしない、かな。誰が誰を好きになるうが、それはその人達の勝手なわけで、外野がとやかく言う事じゃないんじゃないかな？」

愛の形は人其々。愛の何たるかもまだ知らぬ小娘が言ってもさして効力は持たないと思うが、真白は正直にそう思うのだ。

同姓でも、年齢差があっても、好きなら良いではないか。誰かに迷惑をかけぬ事なら、恋愛に限らず全て許される。いや、許されるべきだ。と真白は常々思っている。

「そつだよ。そつなんだよ」

莉香子は納得したのか同意したのかわからない曖昧な口調だった。

「やっぱり愛は自由なんだよ！ 良いじゃないかどんな交わり方も！」

真白は口の中に溜まった唾液を飲もうとしたが、莉香子の言葉で変な飲み方をしてしまい、噎せた。

「けほっけほっ　ま、交わり？」

真白は今朝見た　見てしまった莉香子の本を思い出す。
男と男。裸と裸。

途端に身体が熱くなり、変な汗が滲み出てきた。

「そうさ、どんな交わりも愛の形の一つである！　それを可笑しいとか気色悪いとか言う奴は心が狭いのだ！」

過去にそう言われたのだろうか。言われたのだろう。開放的社会になったとは云え、そう云う事をまだ許容出来ぬ人もいる。仕方のない事ではある。しかし、迷惑を付けていないのなら気にはなるだろうが、黙って目を瞑る事も必要だ。

莉香子は、まあ、愛の形が自由である様に、それらに対する考え方も自由なのだろうね、と先程までの熱を冷まし淡々と述べた。

だから続いた坂を下り、県道に出る。

莉香子と真白は此処から正反対の方角と為るらしいので、真白はそれじゃあ、と別れを告げる。莉香子もああ、また明日、と手を振り反対の道へ歩き出した。

しかし、二歩程歩いた所で莉香子は踵を返し、

「そう云えば真白ちゃん。あたしは男と男が好きなのだが」

嫌な予感がした。

女学園だからこそ、その予感が生じたのかも知れない。

そして、予感は的中した。

「女同士も　好きなのだ！」

由為莉香子は、生粋の、レスビアン同性愛者との事。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256z/>

Seraphim Doll's Fetishism セラフィム・ドールズ・フェティシズム

2011年12月30日02時46分発行